

産経書房

役に立つ

芸術家の人生や時代背景を知ること、作品を理解する助けとなる。芸術と読書の秋、アートを巡る自伝、評伝を手にとってみた。

東京・国立劇場にある名作「鏡獅子」で知られる近代彫刻の巨匠、平櫛田中(1872〜1979年)。その生誕150周年を記念して『平櫛田中回顧談』(小平市平櫛田中彫刻美術館編、中央公論新社・2420円)が刊行された。

昭和40年、93歳の年に、美術評論家の本間正義を聞き手に自らの来し方を語ったこの筆録は、さまざまなる事情でお蔵入りとなっていた。没後40年以上を経て出版され、田中の飾らない人柄をいきいきと伝えてくれる。



平櫛田中 回顧談

芸術の理解に自伝、評伝

大阪の人形師に木彫の手ほどきを受けた後、上京し高村光雲の門下生となった若き日々、師の岡倉天心や臨済宗の高僧、西山木山から受けた多大な影響などが、驚くべき記憶力をもって語られる。仏教説話や中国の故事を題材にした精神性の高い作品、田中らしい写真に優れた肖像彫刻は、こうした修業時代が素地になっているのだろう。

日本画家、狩野芳崖の絶作「悲母観音」を巡る秘話など、当時の美術界に身を置いた田中ならではの証言も。「鏡獅子」のモデルである六代目尾上菊五郎との交流をはじめ、制作エピソードが興味深いのはもちろん、自分が作った観音像が知らぬ間に海外で古仏に化けていたという落語のような話も挟まれ、最後まで飽きさせない。

田中は現在の岡山県井原市に生まれ、明治から昭和にかけて活躍した。百寿を超えてなお現役で制作したという。田中の旧宅を生かした小平市平櫛田中彫刻美術館(東京都)では今、特別展「生誕150年 平櫛田中展」(11月27日まで、火曜休館)が開かれており、実作の鑑賞も合わせて楽しみたい。

賞も合わせて楽しみたい。『矢代幸雄』(稲哲繁美著、ミネルヴァ書房・4950円)は、戦前戦後にわたり海外で日本美術の紹介につとめた美術史家・評論家の矢代幸雄(1890〜1975年)の評伝。原田マハの小説『美しき愚かものたちのタブロー』の主人公のモデルといえはピンとくる人もいるだろう。



矢代幸雄

横濱育ちの矢代は、インドの詩人、タゴールが三溪園(横浜市)に滞在した際に通訳を務めたことから、実業家・東洋美術収集家の原三溪にかわいながら、和辻哲郎ら哲学者、芸術家に広く知己を得たという。その後欧州に留学し、ルネサンスの画家、ポッティチェリの研究で注目を集めるとともに、実業家の松方幸次郎と画廊を巡るなど、国立西洋美術館(東京都)の礎となる「松方コレクション」

世界的建築家、安藤忠雄の半生記『仕事をつくる』(安藤忠雄著、日本経済新聞出版・2145円)は刊行10年を機に改訂



安藤忠雄 仕事をつくる

された新版。2度のがん手術で5つの臓器を失うも、子供の図書館施設「こども本の森」を各地でオープンさせるなど、安藤は歩みを止めない。

独学の建築家が世界に闘いを挑む軌跡は、いつ読んでも鮮やかで、勇気をもたらせる。自分の境遇を環境のせいにするな、可能性に蓋をするなと叱咤してくる一冊だ。(黒沢綾子)